

熊本県阿蘇地域における業務用水稲品種「やまだわら」の移植適期

○林田裕樹・山戸陸也
(熊本農研セ高原)

【目的】

熊本県阿蘇地域では、良食味米の「コシヒカリ」が広く作付けされている。一方で安価な業務用米の需要が高まっており、阿蘇地域においても業務用品種「やまだわら」の導入が始まっている。しかしながら、当品種は登熟期間が長い特性があり、遅植えした場合には登熟期の低温により、収量や品質が低下する事例がみられている。そこで、移植期ごとの栽培特性を把握し、阿蘇地域における移植適期を明らかにする。

【材料および方法】

試験は 2018～2019 年の 2 ヶ年、熊本県阿蘇市一の宮町の熊本県農業研究センター高原農業研究所（標高 543m、黒ボク土、水稻連作）の水田で実施した。移植期は 5 月中旬（2018 年：5 月 17 日、2019 年：5 月 16 日）、5 月下旬（5 月 30 日）、6 月上旬（6 月 7 日）の 3 水準を設けた。育苗期間は 20 日（稚苗）とし、栽植密度は、2018 年は、18.5 株/㎡、2019 年は 19.1 株/㎡とした。試験区は 2018 年：75 ㎡、2019 年：32 ㎡とし、2 反復とした。施肥量は窒素成分で基肥 0.6、穂肥（出穂前 20 日）0.3kg/a とした。

【結果および考察】

5 月中～6 月上旬の移植では、移植期が遅いほど出穂期までの期間が短くなったが、登熟期間は長くなる傾向にあった（表 1）。6 月上旬の移植では、2019 年は成熟期に達しなかったため、年次によっては、登熟期の低温により成熟期に達しないことが懸念される。

稈長は、有意差は無かったものの移植期が遅くなるほど長くなる傾向にあった。2019 年は 6 月上旬の移植で倒伏程度が大きくなった（表 2）。

収量は、2019 年は移植期の中に明確な差はみられなかったものの、2018 年は 6 月上旬移植では、登熟歩合及び千粒重の低下により収量は有意に減少した（表 2）。このことは、登熟期の低温で同化産物の転流が抑制されたためと考えられる。

玄米品質は、6 月上旬移植では、充実不足に加えて乳白粒が発生し、2019 年には検査等級が低下した（表 2）。

以上のことから、収量及び品質の安定を考慮すると、熊本県阿蘇地域における「やまだわら」の移植適期は 5 月中旬～下旬であると考えられる。

表1 移植期別の生育期間

年次	移植期	移植期～ 出穂期の日数	出穂期	出穂期～ 成熟期の日数	成熟期
2018年	5/17	87	8/12	52	10/3
	5/30	78	8/16	62	10/17
	6/7	77	8/23	67	10/29
2019年	5/16	88	8/12	58	10/9
	5/30	83	8/21	53	10/13
	6/7	82	8/28	-	未達

表2 移植期別の生育・収量関連

年次	移植期	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/㎡)	倒伏程度 (1-5)	一穂 粒数	㎡当 粒数 (*100/㎡)	精玄 米重 (kg/a)	比率 (%)	登熟 歩合 (%)	千粒重 (g)	検査 等級 (1-9)	検査等級の 格付け理由
2018年	5/17	84 a	19.8 a	326 a	0.0	137 a	447 a	85.2 a	100	83.0 a	24.4 b	4.5	充実不足
	5/30	87 a	20.6 a	354 a	0.0	129 b	455 a	85.3 a	100	77.6 ab	25.0 a	5.0	充実不足
	6/7	89 a	18.7 b	391 a	0.0	121 b	473 a	74.4 b	87	73.2 b	24.0 b	4.5	充実不足・乳白粒
2019年	5/16	79 A	20.0 A	340 A	0.5	131 A	444 A	62.1 A	100	64.7 A	22.8 A	6.5	充実不足
	5/30	83 A	19.9 A	351 A	0.5	134 A	470 A	62.3 A	100	61.7 A	22.9 A	6.0	充実不足
	6/7	83 A	19.7 A	369 A	1.0	128 A	474 A	61.8 A	100	63.1 A	22.7 A	8.0	充実不足・乳白粒

注1) 倒伏程度は無(0)～甚(5)に数値化した。

注2) 比率は各年次の精玄米重の5月中旬を100とした時の指数。

注3) 検査等級は1(1等上)～9(3等下)に数値化した。

注4) 年次ごとに同一英文字間には、Tukeyの多重比較検定により5%水準の有意差がないことを示す(n=2)。